# マルクス・コルネリウス・フロント

## ——二世紀のある元老院議員の横顔——

島田　誠

### はじめに

マルクス・コルネリウス・フロント Marcus Cornelius Fronto は「五賢帝時代」の後半にあたる二世紀中葉、いわゆる「アントニヌス朝時代」に活躍したアフリカ出身のローマ元老院議員である。彼は古代においては同時代随一の雄弁家として知られ、ハドリアヌス帝時代（一一七～一三八年）には法廷において活躍した。続くアントニヌス・ピウス帝時代（一三八～一六一年）には彼は次代皇帝たるマルクス・アウレリウスとルキウス・ウェールスの修辞学教師に任じられ、生涯にわたって皇帝たちとの親密な関係を保ったことが知られる。また政治家としても一四三年に補充執政官職を務めるなど、政界において成功をおさめたことが知られている。

雄弁家としてのフロントに関して、彼の弟子でもある後の皇帝マルクス・アウレリウス・カエサルはフロントの執政官への就任演説を絶賛し、彼を「ローマの雄弁術の華 decus eloquentiae Romanae」と呼んでいる。[1] フロントの死後百年余りを経ても、彼の雄弁家としての高い評価は維持されていた。三世紀の終わり頃に西部帝国の副帝コンスタンティウス一世に頌詞を捧げた無名の作家はフロントを「ローマの雄弁術の二番目ではなくもう一つの華たるフロント Fronto, Romanae eloquentiae non secundum sed alterum decus」と呼んでいる。[2] ここでローマ雄弁術の一番目の華として想定されているのは、言うまでもなく共和政末期の政治家・雄弁家であるキケロ Marcus Tullius Cicero である。従って古代において、フロントの雄弁はキケロに匹敵すると看做され、もう一人のキケロと賞揚されていたのことになる。

このようにフロントは、古代においては何よりも雄弁家として知られていたが、近代においては専らその書簡集から知られるようになった。この書簡集には三人の皇帝たち、マルクス・アウレリウス、ルキウス・ウェールス、アントニヌス・ピウスとその他の友人たちとの間に交わした書簡と幾つかの演説や著作の草稿が収められている。この書簡集に収められた文章をフロントが書いていた「アントニヌス朝時代」はかつて十八世紀後半にギボンが『ローマ帝国衰亡

史』において「世界史にあって、最も人類が幸福であり、また繁栄した」五賢帝時代の中でも「国民全体の幸福が、統治の唯一の目的とされた、おそらく歴史的にも唯一の時代」と評されていた時代であった。ところが二十世紀後半には、この同じ時代が不安に満ちて緊張が張り詰め、次の世紀に噴出する新たな問題がほとんど抑え切れなくなった時代、いわば「危機に向かう時代」であったと考えられるようになっている。[3] そして、この時代は共和政の歴史におけるリウィウス、キケロやサルスティウス、帝政成立から一世紀までのタキトゥスやスエトニウスなど同時代あるいは比較的信頼できる歴史書や伝記などの文献史料、特にラテン語文献がその数を著しく減らしていた時代でもあった。

このような時代状況の中で、当時最高の雄弁家としての声望を有し、自らもローマの支配階層に属し、帝国統治の頂点に位置する皇帝父子と親しい関係にあったフロントの書簡集の持つ意義は本来は高く評価されるものであろう。ところが現実にはフロント書簡集の文学的な評価は極めて低く、歴史的史料としても活用される場面も少ない。このようなフロント書簡集をめぐる研究状況は、彼にほぼ一世代先行する先輩元老院議員である小プリニウス Gaius Plinius Caecilius Secundus の書簡集をめぐる研究の盛況ぶりと比べると一見不思議に思われる。

本稿では、以上述べてきたようなフロントとその書簡集を二世紀の帝政期ローマ社会の研究に活用するための準備作業として次の手順で検討する。まずフロントの書簡集をめぐる研究の現状を検討し、帝政ローマの社会を研究する上でのその意義を確認する。次いでフロントの経歴やその書簡集の特色を、彼が帝政前期、特に一世紀の半ばから台頭の著しい属州出身の有力元老院議員であったことに注目して検討する。そして、その検討の際には小プリニウスの書簡集との比較を念頭に置くことにしたい。

## Ⅰ　フロント研究の現状とその意義

### 書簡集の発見とその構成

フロントはアントニヌス朝時代を代表する雄弁家であり、哲人皇帝マルクス・アウレリウス（在位一六一～一八〇年）と彼の共同統治帝ルキウス・ウェールス（在位百六十一～一六七年）の修辞学教師であった。古代における修辞学は単に文学的な教養やテクニックを教える教科ではなく、法廷や政治の場での弁論や演説の実践を目的とする教科であった。中でもローマにおいては教育の究極の目的は法廷における弁論で名声を獲得し、元老院や民会などでの雄弁によって国家を指導する政治家を育てることであった。共和政末期に地方都市出身の新人元老院議員でありながら、法廷に名を馳せ、執政官職を務めて有力政治家となり、最後に共和政に殉じた雄弁家キケロの生涯はローマの修辞学教育の理想を具現化したものであった。そして帝政期ローマの修辞学や雄弁術においてフロントはキケロと並び称される成功者であった。

フロントの法廷弁論や元老院などにおける政治的な演説や書簡集は、五世紀までは、その一部が多くの著作家によってしばしば引用されていたが、六世紀以後には彼に関する言及は稀となった。[4] 恐らくローマ帝国西部の各地がゲルマン諸王国の支配下に入った五世紀

の混乱の中で、フロントへの関心が薄れ、やがてはその著作自体が失われていったと思われる。彼の演説の多くは現在でも失われたままである。そのような状況下、実際にその文章が読まれることなしに、彼は哲人皇帝マルクス・アウレリウスの相談役、偉大な文人政治家として理想化され、賞揚されていた。

皇帝たちや知人との間に交わされた書簡集も古代末期から中世初期に一度忘却されたが、十九世紀初頭に再発見されて次々に校訂本が公刊されるようになった。[5] 一八一一年にミラノのアンブロシウス図書館において後の枢機卿 A. Mai が偶然に重ね書きされた写本の中からフロントの書簡集のテキストを発見し、一八一五年に近代最初の刊本を公刊した。その後 Mai はヴァティカンの図書館において同じ写本の別の部分を発見して一八二三年ミラノの断片も含めた刊本を公刊した。古代以来のフロントの名声もあって多くの学者たちがフロントの書簡集に取り組むことになった。

フロント書簡集を利用する際に念頭に置くべき写本の問題点は次の三点であろう。まずミラノ、ヴァティカン両図書館の写本が本来は北イタリアのボッビオの修道院に所蔵されていた単一の写本の一部であったことである。第二の点は、この写本がテキストの重ね書きされた、いわゆる「パリンプセスト」であることである。恐らく五世紀後半に書かれたフロントの書簡集の上に、七〇〇年頃にボッビオ修道院において、カルケドン公会議（四五一年）の議事録のラテン語版が重ね書きされているのである。しかもフロントの書簡集自体もさらに古いテキストの上に重ね書きされたものであった。また最後に写本の保存状態も良好とは言い難い点にも注意すべきである。写本の発見者であり、最初の校訂者である Mai が解読のために薬品を濫用したため、写本には元々の欠落している頁に加えて多くの判読困難な箇所が生まれ、書簡集のテキストに多くの脱落部 (lacuna) が存在することになった。

このようにして発見されたフロントの書簡集は文通相手と内容によって表題の付けられた十数遍の小品から構成されている。『マルクス・カエサル宛書簡集と返書』『マルクス・アントニヌス帝宛書簡集と返書』『ウェールス帝宛書簡集』『マルクス・アントニヌス宛、雄弁術に関する書簡集』『マルクス・アントニヌス宛、演説に関する書簡集』『アントニヌス・ピウス宛書簡集』『友人宛書簡集』『歴史の序』『煙と塵への賛辞』『怠慢さへの賛辞』、『パルティア戦争について』『アルシウムの祭日について』『亡き孫について』『アリオン』『カルタゴ人たちのための元老院での感謝演説』である。表題からも分かるように演説や著作の草稿として書かれた書簡も含まれるが、中心となるのはマルクス・アウレリウス帝との交換書簡である。

刊本によって数え方は異なるが、マルクス帝との交換書簡は百通以上を数える。これに対してウェールス帝との交換書簡は十四通、ピウス帝とは十通に過ぎない。また友人たち宛の書簡集には四十二通の書簡が収められている。これらの書簡の執筆年代に関しては、ピウス帝の即位の翌年である一三九年から、ルキウス帝がパルティア戦争から凱旋した翌年である一六七年の間と考える説が優勢である。[6]

## フロント書簡集の評価

古典学者たちは、前述のような事情で再発見されたフロントの書簡集を大きな期待を持ちつつ迎えた。ところがその期待は裏切られ、彼らは大きな失望感を味わうことになった。特に初期の校訂者たちは、その失望の念を隠さず、書簡集の内容と文体への不満を公言している。ある校訂者はフロントは「退屈かつ軽薄であり、雄弁さの対極に位置している」と酷評し、また別の校訂者はこの書簡集は「重ね書きされた写本の中に埋もれたままの方がよかった」と嫌悪と軽蔑の念を隠していない。(7)

またラテン文学の標準的な概説書においてもフロントの文学的な評価は著しく低い。ケンブリッジ大学出版局版『古典文学史Ⅱラテン文学』のフロントに関する項目では次のように述べられている。(8) この項目の執筆者は書簡集がフロント自身によって公刊を意図されたものでも公刊されたものでもないこと、(9) 文通の相手が皇帝たちであって親密さや率直さは期待できないこと、書簡の内容への評価が彼の演説の価値への類推を正当化しないなどと、比較的公正にフロントを評価しようとしている。しかしながら、こと書簡集そのものの文学的評価に関しては次のような辛辣な言葉を並べている。「フロントの書簡と多数の（大半がマルクス・アウレリウスからの）彼宛の返書は書き手を除くとほとんど誰の興味も引かず、それらは時には単なる丁寧な儀礼的言辞の交換に過ぎない」、「フロントの知的関心は小プリニウスと比べると、それ自体広くはなく哀しいほどに限定されている」、「陳腐なテーマに関する彼の繰り返しや言い換えは退屈さを発散している」などと述べられているのである。筆者もこのようなフロントの書簡集の文章に関する見解には全面的に賛同せざるを得ない。

以上のような文学的評価の低さと先に述べた写本の保存状況の悪さの結果、フロントに関する文学的・文献学的研究はさほど盛んではない。フロント書簡集には小プリニウス書簡集のような詳しい注解書が刊行されておらず、また刊本ごとに書簡の配列や巻・書簡・節番号が異なり、他の刊本との対照表が不可欠となるなど、およそある程度名前の知られたギリシア・ラテン語古典文学作品としてはいささか異例な状況が生じているのである。

さてほぼ全面的に否定的なフロント書簡集の文学的評価に対して、その歴史的価値には肯定的な評価も存在する。既に十九世紀の後半に、Th. Mommsen はフロント書簡集は歴史家にとってキケロの書簡集に劣らない宝庫であると述べている。彼によれば、フロントの書簡集は、性格描写や歴史的に有用な事実の充実度ではキケロ書簡集にはるかに劣るとは言え、興味深い時代の信頼できる史料である点は共通であると評価している。(10)

また Champlin は、フロント書簡集が二つの意味で歴史的に重要な意義を有していると指摘している。(11) 第一に同時代の指導的な雄弁家であって三十年間にわたって皇帝一家の相談役であった人物とローマ皇帝とが書簡のテーマに選んだ話題は何であれ、ある意味で重要であって入念な検討に値する。第二に書簡集そのものがアントニヌス時代の皇帝支配や貴族社会を理解するために重要な社会史の史料であり、個々の書簡から何か新しい事件が知られるわけではないが、書簡集を全体として検討することによって、当時の支配エリ

ートの社会を再構築することが可能となる。

しかしながら、このような Mommsen や Champlin の言にも拘わらず、フロントを主たる史料とした歴史研究は盛んとは言い難い。果たしてフロントを歴史研究の史料とすることは、本当に可能だろうか。フロント自身の経歴や書簡集の特色を一世代古い小プリニウスの経歴や書簡集と比べつつ検討してみたい。

## Ⅱ　フロントと小プリニウスの経歴

### フロントの経歴

まずフロントの経歴を史料から分る限り見ていくことにする。

フロントはその書簡の記述からアフリカの属州ヌミディアの都市キルタの出身であることが知られている。[12] キルタは古くはフェニキア人の都市であり、前三世紀末以降にはヌミディア王国の都として繁栄していたが、帝政期にはローマの植民市となっていた。フロントの家系がアフリカの土着の家柄であるか、イタリアから移住してきた植民者の子孫であるかについて確定する史料は存在しない。また書簡集においてはフロントの父祖についての記述は、両親の世代の経済状況に関する漠然とした一文を除くと皆無である。[13] しかしながらフロントがローマの元老院議員、執政官となった事実から、彼の家系がキルタの都市支配階層に属し、恐らくローマ騎士の家柄であったことはほぼ間違いない。

彼の生年についても確かな証拠は存在しない。唯一、指標となるのは彼が一四三年に執政官職に就任したことであろう。この時代では昇進の早い名門出身者は三十二歳頃に執政官に就任するが、フロントのような新人の場合には四十三歳が平均的な就任年齢である。[14] 従って一〇〇年頃を彼の生年とするのが妥当な判断であろう。なおフロントには兄弟が一人いたことが書簡集から知られる。[15] この人物は一四七年に補充執政官を務めたクィントゥス・コルネリウス・クァドラタであると考えられている。[16]

アントニヌス・ピウス帝によってマルクス・アウレリウスとルキウス・ウェールスの教師に任命されるまでのフロントの前半生の経歴はアフリカの都市カラマエの住民から捧げられた顕彰碑文から概略が知られる。「ティトゥスの息子、クィリーナ区所属、処刑担当三人委員、属州シチリア担当の財務官、平民按察官、法務官（を歴任した）保護者であるマルクス・コルネリウス・フロントのためにカラマエの自治市市民が（捧げた）」。[17] この碑文からは彼の父親の名前がティトゥスであったことと、彼自身が元老院議員としての典型的なコースで公職を務めていたことが判明する。

処刑担当三人委員を務めていることから、フロントが十八歳前後にローマ市にいたことは確実である。実際には、恐らく十代の半ばには修辞学教育の最後の仕上げためにローマ市に来ていたと考えられる。[18] 従って彼がその生活の本拠をローマに移したのは恐らく一一〇年代の半ば頃である。以後、彼は基本的にローマ市を本拠として、その生涯のほとんどを過ごしたと思われる。

公職におけるフロントの昇進の早さが平均的なものであったと仮定すると、彼の経歴は以下のようなものとなる。まず彼は二十歳前後の一二〇年頃に軍団高級将校となって軍隊に勤務したはずである。続いて一二〇年代半ばに財務官職を務め、一三〇年頃に法務官に就

任したと推定できる。従って彼がローマ市において公職の大半を経験したのは、ハドリアヌス帝時代（在位一一七～一三八年）のことなる。そのハドリアヌス帝の治世が終わるまでに、フロントは法廷の第一人者としての声望を獲得することに成功していた。[19] なお法務官職と執政官職との間の十数年の間に何らかの行政官職、恐らく幾つかある国庫の長官の一つを務めたはずであるとの推測もあるが、[20] 史料的には証明できない。

すでに何度も述べたようにアントニヌス・ピウス帝の即位（一三八年）と共にフロントは次代皇帝たるマルクス・アウレリウスとルキウス・ウェールスの教師に任命された。彼は、マルクス・アウレリウスが二十二歳の年（一四三年）に共和政以来のローマの最高公職である執政官職に就任した。[21] その後、十数年を経て属州アシアの総督に選ばれて、元老院議員としての経歴の最後の段階に達したが、折悪くフロントは体調を崩したため、ピウス帝に任地への赴任の猶予を願ったことが知られる。[22]

フロントの没年についても確実な史料は存在せず、書簡集の執筆年代の下限がフロントの死亡年代を推定する唯一の指標となる。従って書簡集の最後の書簡が書かれてた一六七年から日を経ずしてフロントは亡くなったと考えられる。[23] 死亡時の彼の年齢は六十歳代の後半であったと推定できる。

最後に、彼の家族について確認できるのは以下のような事実である。彼の妻の名前は、クラティア Cratia と言い、マルクス・アウレリウスの母ドミティア・ルキッラ Domitia Lucilla に親しく、その庇護下にいる者（cliente）と呼ばれている。[24] 彼女は一四三年には既にフロントの妻であり、一六四ないし一六五年に亡くなった。[25] フロントは恐らくクラティアとの間に六人の子供をもうけたが、五人が夭折した。[26] またいささか不自然に思われるが、友人宛の書簡の「もし私に男の子たちさえ生まれ、まさにこの時に彼らが兵役を果たす年齢までに成長していたならば」という記述から、彼の子供は全て女子であったと考えられている。[27] 無事に成長したのはコルネリア・クラティアと言う名前の娘一人であり、彼女はイタリア中部のウンブリア地方出身の元老院議員ガイウス・アウフィディウス・ウィクトリヌス Gaius Aufidius Victorinus と結婚して、三人の子供をもうけ、二人の男子が成人している。[28] フロントの義理の息子は執政官を二回務め、ローマ市長官にも就任した。また孫たちもそれぞれ執政官職に就任し、その一人は父親と母方の祖父の名前を継いでマルクス・アウフディウス・フロントと名乗ったことが知られている。

## 属州出身の有力元老院議員

前項で述べたフロントの経歴を一世代前のトラヤヌス時代の元老院議員小プリニウスの経歴と比較して検討してみたい。[29]

まず言えることは、両者の経歴が大筋において類似しており、彼らがほぼ同じ社会階層に属していたことである。小プリニウスは北イタリアの小都市コームム（現在のコモ）の名望家の家に六一ないし六二年に生まれ、騎士級公職者として皇帝たちに仕えていた母方の伯父ガイウス・プリニウス・セクンドゥスの跡継ぎとなった。彼は故郷のコームムで教育を受けた後にローマに赴いて著明な修辞学

者クィンティリアヌスの下で学んだ後に、元老院議員となるための公職コースに従ってキャリアを歩み始めた。

彼の公職者としての経歴の概要は彼の遺言でコームムに贈られた公共浴場に刻まれた碑文から判明する。[30] 彼の就任したことが分かる公職・行政官職は、民事小法廷十人委員、ガリア第三軍団高級将校、ローマ騎士六人役、皇帝付き財務官、護民官、法務官、軍事金庫長官、サトゥルヌス金庫長官、ティベル川護岸・ローマ市下水道管理官、属州ポントス・ビテュニア特任長官、鳥占官、執政官である。また小プリニウスは元老院議員として公職コースを昇進する傍ら法廷でも令名を馳せた。

このように、フロントと小プリニウスとは、非常によく似た経歴を歩んでいる。彼らは共に共和政期や帝政成立期以来の伝統を有する元老院議員身分の家系ではなく、地方・属州の都市支配層（いわゆる都市名望家層）の出身であった。彼らは少年時代に修辞学を学ぶためにローマ市に移り住み、元老院議員としての履歴を歩み始めた。彼らは共に成功して執政官職に昇進したが、その成功には法廷での名声が大きな力となっていた。この成功の結果、彼らは最高権力者である皇帝に信任され、彼らの書簡集には皇帝との交換書簡が収められているのである。[31]

彼らのような地方都市や属州出身の新人たちは一世紀後半のフラウィウス朝時代（六九～九六年）に元老院に進出を始めてローマの支配階層の気風を一変させたと伝えられる者たちである。小プリニウスの同時代人であり、自身も恐らく属州（ガリア）出身の新人であったタキトゥスの『年代記』に次のように記述がある。[32]「（イタリアの）自治市や植民市出身だけではなく、属州出身の新人たちも次々に元老院に採用されて故郷の質素さを持ち込んだ。彼らの大半が幸運や勤勉のゆえに裕福な老年に到達したとしても昔の精神は保たれていた。（中略）先人たち間の全てが優れていたわけではなく、我等の時代にも後世の人々にとって模倣とすべき多くの称賛すべきものや才能が存在していた」。

タキトゥスが「我等の時代」と呼ぶトラヤヌス時代（九八～一一七年）には、トラヤヌス帝自身もヒスパニアの属州バエティカの都市イタリカの出身であるなど、属州出身者の進出の著しい時代であった。この時代のローマ帝国の政治や社会は彼らのような地方都市・属州出身者が指導していたと考えられる。

## Ⅲ　フロント書簡集の問題点と可能性

前節で述べたような出身や経歴の外面的な一致にもかかわらず、フロントと小プリニウスの書簡集の読後感は大きく異なる。その理由として考えられるのは、まず両者の文通相手の相違や取り上げられる話題の違いなど、書簡そのものの性格である。これらの性格を正しく把握するためには、第Ⅰ節で述べたフロント書簡集の問題点、写本状況の悪さと書簡集自体の文学的価値に加えて、書簡集の編者や編集意図の問題も検討しなければならない。

両者の書簡集の最も目立つ違いは、皇帝との交換書簡が全体の中で持つ比重とそこで取り上げられる話題の選択である。小プリニウスの書簡集ではトラヤヌス帝との交換書簡は、十巻中一巻を占めるに過ぎず、書簡集の中心は飽くまで数多くの友人たちに宛てた書簡

である。一方、現存のフロントの書簡集は、第I節で示した構成が示すように皇帝たち、中でもマルクス・アウレリウス帝との交換書簡を中心に編纂されているように思われる。

両書簡集における皇帝たちとの交換書簡で取り上げられる話題も大きく異なっている。小プリニウスのトラヤヌス帝との交換書簡には、新年の挨拶など儀礼的な書簡や私的な推薦状も含まれるが、中心となるのは彼の属州長官時代（一〇九～一一一年）における属州行政に関する報告や指示を求める請訓書簡とそれらに対するトラヤヌス帝の返書である。[33] これに対してフロントとマルクス・アウレリウス等との交換書簡は、儀礼的なものと推薦状を除くと、雄弁術や演説など修辞学関係の話題が目立つ。

さらにフロントの書簡集を読んで気付く第二の問題は、フロントの履歴の中で一四三年の執政官以前の公職や行政官職に関してほとんど触れられていないことである。また当時、大変な栄誉とされて元老院議員の経歴の掉尾を飾るものとされる属州アシアの総督職についても先に触れたように簡単に言及されるのみである。これに対して小プリニウスの書簡集では彼の務めた公職や行政官職とそれらでの精励ぶりが饒舌なまでに語られ、皇帝との関係も基本的には行政官職を通じてものであったと考えられる。

このような両書簡集の違いが、一世代を隔てる二人の元老院議員、小プリニウスとフロントとの歴史上の実像の相違であるかどうかを判断することは困難である。まず写本の状況から、我々が手にしている書簡集が古代に刊行されたフロント書簡集の全貌をどの程度正確に反映しているのかを判定することはできない。また現在のフロント書簡集が古代に刊行された書簡集の構成を反映しているとしても、その書簡集の編者とその編集意図の問題が残る。小プリニウス書簡集については、巻頭の書簡から彼本人が書簡を選んで配列したものであることが明らかであるが、[34] フロントに関しては、諸説あって編者を確定することはできない。[35] それらの諸説の中で、最も説得力を持つと思われるのは、フロントの孫もしくはさらに後代の子孫とする Champlin の説である。[36]

フロントの名前を継いだ孫のマルクス・アウフィディウス・フロントは夭折した自分の息子の墓碑に次のような碑文を刻んでいる。「雄弁家、執政官を務め、ルキウス帝とアントニヌス帝の教師であるマルクス・コルネリウス・フロントの曾孫であり、ローマ市長官、執政官を二回務めたアウフィディウス・ウィクトリヌスの孫である最愛の息子マルクス・アウフィディウス・フロントのために、執政官を務めたフロントが（墓碑を建てた）[37]」と。この碑文において、アウフィディウス・フロントは、彼の家の始祖たる祖父フロントを雄弁家、執政官、そして皇帝たちの教師と呼んでいる。この孫によるフロントの位置付けが現存するフロント書簡集の構成や内容によく符合しているのである。

この推測が正しいとすると、書簡集から受けるフロント像は彼の子孫が望んだものであってフロントの歴史上の実像ともフロント自身の認識とも異なる可能性が生じる。このような恐らく子孫による自己認識として興味深いものであるが、フロント書簡集を史料として用いるためにはむしろマイナスの材料となる。

フロントの位置付けは、それ自体は二世紀後半の元老院議員家系の

ではフロント書簡集を史料として用いることが全面的に困難であるかと言えば、必ずしもそうではないと考えられる。書簡集中でその編集意図から見て重要視されていない部分、すなわち友人たち宛の四十二通の書簡が注目される。この部分の書簡は皇帝たちとの交換書簡に比べると先に述べた編者の意図の影響が少ないと考えられるのである。すでに紙幅が尽きかけているために、個別の問題について詳論することはできないが、友人宛書簡集全体から見て興味深い二点のみを指摘したいと思う。

第一に注目されるのは、フロントの友人宛書簡集から知られるフロントの交友範囲の地理的な広さである。プリニウスの交友圏は基本的には彼の出身地である北イタリア中心であるが、書簡の数がプリニウスの書簡集の約六分の一に過ぎないにもかかわらずフロントの交友圏は出身地のアフリカからイタリア中北部、さらに小アジアの諸属州にまで及ぶ。[38] 第二に注目すべきなのは、そのようなフロントの広範な交友関係において文学的教養が重要視されていたことである。一例を挙げれば、友人宛書簡集の冒頭の手紙において友人を有力な元老院議員に紹介する際、友人の勤勉さや愛郷心に加えて文学への情熱や学芸への趣味の良さを特記し、その友人への信頼がかつて「共に生活し、共に学び、遊びも真面目なことも共にしたことに」よると述べられている。[39]

このようなフロントの友人宛書簡集からアントニヌス朝時代のローマ帝国において修辞学教育によって共通の文学的教養を身に付けた帝国各地の出身者から構成される広範な交友圏が成立していたことが推定できる。このような帝国規模の交友圏の存在は一世代前の小プリニウス書簡集には見い出すことができない。

## おわりに

筆者は、Mommsen や Champlin 等の主張する歴史史料としてのフロント書簡集の価値に基本的に同意したいと思う。この書簡集、特に『友人宛書簡集』の内容や文通相手の分析から、アントニヌス朝時代の典型的な有力元老院議員の社会的背景や交友圏を知ることができるからである。その分析から一世紀なかばのフラウィウス朝期から帝国の支配層に進出を開始し、二世紀初頭のトラヤヌス時代にその地位を固めた地方都市や属州出身者たちが二世紀なかばのアントニヌス朝時代にどのように変貌しつつあったのかについての手がかりが得られるのである。

**［付記］**

本稿では、フロントの著作（書簡）は、原則として M. P. J. van den Hout の校訂になる Teubner 版、*M. Cornelii Frontonis epistulae schedis tam editis quam ineditis Edmundi Hauteri usus iterum edidit Michael P. J. van den Hout*, Leibzig, 1988 から引用する。しかしながら引用箇所を特定する巻・章・節番号が確定せず、刊本によって異同のあるフロントの書簡集の現状に鑑み、比較的入手しやすい Loeb 版、C. R. Haines ed., *The Correspondence of Marcus Cornelius Fronto with Marcus Aurelius Antoninus, Lucius Verus, Antoninus Pius, and Various Friends*, Cambridge, Mass. & London, 1928-29 の頁数を付記する。

註

(1) *Ad M. Caesarerm et invicem*, 2. 6. 2 (Loeb, i, p. 130).

(2) *XII Panegyrici Latini*, 8 (5). 14. 2.

(3) E. Champlin, *Fronto and Antonine Rome*, Cambridge, Mass. & London, 1980, p. 1. また南川高志『ローマ皇帝とその時代　元首政期ローマ帝国政治の研究』創文社、一九九五年、二四一頁以降も参照のこと。

(4) M. P. J. van den Hout, Testimonia et Fragmenta, in: *M. Cornelii Frontonis epistulae* …, pp. 259-276.

(5) M. P. J. van den Hout, Prolegomena, in: op. cit., pp. VIII -XXX III; LXIII-LXXIX. L. また D.Reynolds (ed.), *Texts and Transmission. A Survey of the Latin Classics*, (Oxford, 1983), p. 173f. も参照。

(6) Champlin, op. cit., pp.131-136; M. P. J. van den Hout, Epistulae ordine chronologico quod fieri potest dispositae, in op. cit., pp. 292-294. 一方 Th. Mommsen, Die Chronologie der Briefe Frontos, in: *Gesammelte Schriften* Bd. 4, Züich und Hildesheim, 1906 p. 486 (=*Hermes*, 8, 1874, p. 216) は、*ad M. Antoninum de orationibus*, 14 (Loeb, ii, pp. 112-114) における「アントニヌスあるいはコンモドゥスあるいはピウスの銀貨」の記述中のコンモドゥスをマルクス・アウレリウスの息子であるとし、彼の貨幣が一七五年以降に出現していることから、この書簡の執筆年代は一七五年以降だとする。これに対して Birley, A. R., A Nickname for Commodus and the Date of Fronto's Death, *Chiron* 2, 1972, 469f. はこの貨幣 (nummus) をコンモドゥスがカエサルとなった一六六年になった際に出された記念メダルであると推測する。また Champlin, op. cit., pp.139-142 はルキウス・ウェールス帝の旧名がルキウス・コンモドゥスであることを指摘し、このコンモドゥスが実はルキウス・ウェールス帝であるとする。筆者も、書簡集中の他の手紙で一六〇年代以降に執筆された可能性のあるものがないことから、Champlin 等の説を支持する。

(7) Champlin, op.cit., pp.1f.

(8) 実際はこの点に関しては研究者の間で見解が分かれている。Mommsen, op. cit., p. 472 (=*Hermes*, 8, 1874, p. 201) はフロントト自身が書簡集を編纂して公刊したのか、彼の死後に友人たちが行ったのかは確定できないとしながらも、非常に多様な内容に対してよく計算された作品の構成がフロントト自身が刊行したとの仮説を支持すると述べる。P. Cugusi, *Evoluzione e forme dell'epistolografia latina*, Roma, 1983, pp. 246ff. はフロントト自身が書簡集を構成する個々の小品を公刊し、後に親しい友人たちの中の誰かが単一の書簡集にまとめたと主張する。これに対して、C. R. Haines ed., *The Correspondence of Marcus Cornelius Fronto* …, p. xviii; M. P. J. van den Hout, Prolegomena, in: op. cit., p. LIX はフロントト自身が交換に関与したことを否定する。フロントト自身以外の刊行者の候補として、E. Champlin, The Chronology of Fronto, *The Journal of Roman Studies*, 64, 1974, 157 はフロントトの孫もしくはさらに後代の子孫である可能性を指摘している。

(9) F. R. D. Goodyear, Rhetorics and Scholarship, in : Kenney, E. J., *The Cambridge History of Classical Literature. II Latin Literature*, Cambridge, New York, & Melbourne, 1982, pp. 676f.

(10) Mommsen, op. cit., p. 469 (=*Hermes*, 8, 1874, p.194).

(11) Champlin, *Fronto and Antonine Rome*, … , pp. 2f.

(12) *Ad amicos*, 2. 11 (Loeb, i, p.292).

(13) *Ad amicos*, 2. 7. 15. なお Loeb 版のテキストには、この文章は存在しない。

(14) E. Groag et A. Stein eds., *Propsopgraphia Imperii Romani*, Berlin, 1933- , C 1364 は、フロントトの生年が 110 年以降ではないと述べるのみである（なお本書は以後 *PIR*$^2$ と略記する）。一方 Champlin, op.

cit., pp.137f. はフロントの昇進は遅かった考えて、フロントの生年を九五年頃と考えている。

(15) *Ad Verum Imp. et invicem*, 1. 6. 4 (Loeb, ii, p.152); *Ad M. Caesarem et invicem*, 2. 12 (Loeb, i, p.144); ibid., 4. 8. 1 (Loeb, i, p. 184).

(16) Champlin, op.cit., p. 9.

(17) H. Dessau, *Inscriptiones Latinae Selectae*, Berlin, 1892-1916, 2928: "M. Cornelio T. f. Quir. Frontoni IIIvir. capital., q. provinc. Sicil., aedil. pl., praetori, municipes Calamensium patrono" (以下、本書は *ILS* と略記する)。

(18) Champlin, op. cit., pp.20f.

(19) Cassius Dio, 69. 18. 3.

(20) Champlin, op. cit., pp. 80f.

(21) *Ad M. Caesarem et invicem*, 2. 2. 4 (Loeb, i, p.122).

(22) *Ad Antonium Pium*, 8. (Loeb, ii, pp. 236-238). この書簡の主旨は、通常は病気を理由に総督職を辞退することを願ったものであると考えられている。しかし、Champlin, op. cit., p. 164 n. 13 は *Ad M. Caesarerm et invicem*, 5. 51 (Loeb, pp. 234-236) の記述からフロントが実際に属州に赴任していると見られることから、単に属州への出発期日の延期を願ったものであると示唆している。

(23) 註 (8) で言及したように Mommsen, op. cit., p.472 (=*Hermes*, 8, 1874, p. 201) 等は書簡集の最後の手紙が一七六年以降に執筆されたと考えるため、フロントがマルクス帝の没年である一八〇年頃まで生存していたと主張する。PIR² art. loc. もフロントの没年は一七六年以降であるとする。

(24) *Ad M. Caesarem et invicem*, 2. 13; 14 (Loeb, i, pp. 144-149). なおフロントの妻の名前については、かつてグラティア Gratia であると考えられていた。しかしギリシア語の書簡において彼女の名前が Krateia と綴られていること、今世紀半ばに出土した碑文 (*L'année épigraphique*, 1945, n. 38) からフロントの娘の名前がコルネリア・クラティア Cornelia Cratia であることから、現在ではギリシア系の名前であるクラティアが正しいと考えられている (cf. Champlin, op. cit., p. 26).

(25) フロントと妻クラティアの結婚の年代については、*Ad M. Caesarem et invicem*, 2. 13; 14 (Loeb, i, pp. 144-149) を参照。また彼女の死については、パルティアとの戦争のために東方のシリアに滞在していたルキウス・ウェールス帝への書簡 *Ad Verum Imp. et invicem*, 1.8 (Loeb, ii, pp.232-234) で触れられている。

(26) *De nepote amisso*, 2. 1 (Loeb, ii, p. 222).

(27) *Ad amicos*, 2. 1. 1: "si mihi liberi etiam virilis sexus nati fuissent eorumque aetas hoc potissimum tempore ad munia militiae fungenda adolesceret, ...". Cf. *PIR*², art. loc.

(28) *Ad amicos*, 2. 11. 1 (Loeb, i, p. 292). またフロントの義理の息子と孫たちの経歴に関しては、*PIR*² A 1385; 1393; 1394 を参照のこと。

(29) 小プリニウスの経歴については、A. N. Sherwin-White, *The Letters of Pliny. A History and Social Commentary*, Oxford, 1966, pp. 69-82 を参照。また弓削達『素顔のローマ人（生活の世界史4）』河出書房新社、一九七五年も参照のこと。

(30) *ILS*, 2927.

(31) 既に述べたようにフロントの書簡集の中心はマルクス・アウレリウスをはじめとする皇帝たちとの交換書簡である。これに対して、小プリニウスの書簡集では九巻にわたる多種多様なテーマに関する友人宛の書簡が数の上では上回るが、それでも十巻に計百二十四通のトラヤヌス帝との交換書簡が収められている。

(32) Tacitus, *Annales*, 3. 55: "simul novi homines e municipiis et coloniis atque etiam provinciis in senatum crebro adsumpti domesticam parsimoniam intulerunt, et quamquam fortuna vel indust-

ria plerique pecuniosam ad senectam pervenierunt, mansit tamen prior animus.…nec omnia apud priores meliora, sed nostra aetas multa laudis artium imitanda posteris tulit."

(33) Sherwin-White, op.cit., pp.525ff. 弓削達「総督としてのプリニウス（小）」秀村欣次、久保正彰、荒井献編『古典古代における伝承と伝記』岩波書店、一九七五年、二二九～二五五頁も参照。

(34) Plinius, *Epistulae*, 1. 1.

(35) 註（8）を参照のこと。

(36) E. Champlin, *The Chronology of Fronto*…, p. 157

(37) *ILS*, 1129: "M. Aufidio Frontoni, pronepoti M. Corneli Frontonis oratoris, consulis, magistri imperatorum Luci et Antonini, nepoti Aufidi Victorini praefecti urbi, bis consulis, Fronto consul filio dulcissimo."

(38) Champlin, *Fronto and Antonine Rome*…, p.73.

(39) *Ad amicos*, 1. 1 (Loeb, i, pp.282-286) : "habitavimus una, studuimus una, iocum seriumque participavimus…"